

機関番号：24201

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007 年度 ～2010 年度

課題番号：19520706

研究課題名 (和文) 集落内水路に関する環境民俗学的研究

研究課題名 (英文) Environmental folkloristic Study on the waterway in villages

研究代表者

市川 秀之 (ICHIKAWA HIDEYUKI)

滋賀県立大学・人間文化学部・教授

研究者番号：80433241

研究成果の概要 (和文)：

集落内水路はほぼ全国にみられ、飲料水や洗濯、洗浄、船の運行などに利用されてきた。本研究では環境民俗学の立場から、文献による事例収集および現地調査を実施し、集落内水路を大きく流水型と溜水型に分類した上で、その機能が飲料水や洗濯などの直接身体に接触するものから、間接的な接触へと変化してきたことなどを明らかにし、今後の文化資源化については、景観面での整備だけではなく、その機能の再評価が必要であることを提言した。

研究成果の概要 (英文)：

The waterway in villages is seen almost in the whole country, and has been used for the drinking water, washing clothes and other things, and the ship-way.etc. The case collection by the document and fieldwork are executed from the standpoint of environmental folklore. The waterway in the village can be assorted into flow-type and moat-type. It was clarified that the function of waterway have changed from the one in direct contact with a body such as drinking and washing to indirect contact. It was proposed that not only maintenance on the spectacle side but also the function for cultural capitalizations is necessary in the future.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,200,000 円	360,000 円	1,560,000 円
2008 年度	700,000 円	210,000 円	910,000 円
2009 年度	600,000 円	180,000 円	780,000 円
2010 年度	900,000 円	270,000 円	1,170,000 円
総計	3,400,000 円	1,020,000 円	4,420,000 円

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学/ 文化人類学・民俗学

キーワード：環境・集落・水利用

1. 研究開始当初の背景

近年、伝統的な環境への対応や環境観に対する注目が高まり、集落景観に対する関心も大きなものとなってきている。このような流れの中で集落内水路に対する社会的な関心の高まりもみられ、豊かな湧水によって知られ

る高島市針江などはたびたびテレビでも取り上げられるようになってきている。しかしながらこれまで民俗学の立場からは集落内水路に対する研究はほとんどなされていなかった。

2. 研究の目的

民俗学においては、近年環境面に対する関心が高まり、環境民俗学、生態民俗学などの分野が確立されつつある。しかしながらその視線は主に生業面に注がれ、生活面についてはいまだ環境民俗学的な研究はほとんど行われず、多様な自然・社会環境に対応してきた住民の生活を総括的に理解するに至っていない。集落内水路は末端では農業用水路として利用され、その環境民俗学的研究は生活面での研究を大きく進めるとともに、生活と生業の関連についても水利用の面から明らかにする。さらに集落内水路は、伝統的な集落の景観構成要素として重要であり、その保存や景観整備についても本研究は貢献する。さらにこの研究の成果をさまざまな形で社会に還元していく中で、集落内水路に対する関心をさらに喚起し、今後の集落内水路のあり方を考える一助とすることも目的であった。

3. 研究の方法

- ①事例の収集；自治体史や民俗調査報告書を検索し、集落内水路の利用についての事例を収集し、全国的な状況を把握する。
- ②現地調査；典型的な事例について、現地で集中的な調査を実施し、集落内水路の現状を地図化するとともに、その利用の変遷について聞き取り調査を実施する。
- ③歴史の変遷の調査；滋賀県を中心とした地域において集落内水路に関連する歴史資料を収集し、その変遷について考察する。

4. 研究成果

- ①集落内水路をめぐる全国的な状況
集落内水路に関する総括的な研究はこれまでほとんどみられなかったため、自治体史や民俗調査報告書を検索し、その事例を収集した結果、約 400 件の事例を集めることができた。この作業からは北海道を除いているが、これは当該地において民俗調査の事例が少ないためであり、集落内水路の分布については現在のところ明らかではない。この作業の結果、北海道意外のすべての都府県で事例を見出すことができた。ことに事例数が多かったのは、群馬県、山梨県、長野県、岐阜県、滋賀県、静岡県などであった。これは文献に記された事例数であり、そのまま実際の分布状況を示すものではないものの、おおよその状況を把握することはできる。山が多く、河川や湧水などの水量が豊富な地域において、集落内水路が多くみられることについては確かであろう。これに比して奈良県、大阪府、広島県などの瀬戸内式気候に含まれる少雨地域に事例は少なく、また雨量が多くても沖縄県のように山が少なく河川の水量が乏しい場所においても集落内水路の事例はそれほどみられない。

集落内水路の名称については、特定のものをもち地域は少なく、多くの地域ではカワと呼称されていた。またツカイガワ・ナガレガワ・オモテノカワなどのようにカワに修飾語をつけたものも見られる。これらカワ系の語彙に対して、ホリ・ホリワリ・セギボリなどホリ系の語彙もみられる。カワとホリは滋賀県などでは流水があるものをカワと呼び、水が流れていないものをホリという区別があり、ホリは琵琶湖に沿った低湿地に多く見られるという特色があるが、このような区別はほぼ全国的にも指摘できる。またセギ・センゲなどのセギ系語彙も東日本を中心にみられる。また集落内水路を利用する形態のうちもっとも普遍的にみられる洗い場については、アライバ・カワト（カワド）・カワバタ（カバタ）・ミズヤ・カワヤなどの名称がみられる。

②集落内水路の地域的展開

4年間を通じて、約 20 集落で集中的な現地調査をおこなったが、そのうち良好なデータを収集できた事例について簡単に報告し、集落内水路と地域とのかかわりについて述べることにしたい。

（新潟県新発田市米倉）

加治川にそった平野部の農村で、加治川から引いた水路を集落内水路として利用している。水路は集落の入り口で3筋にわかれ集落を出ると農業用水として利用される。米倉の集落内水路の大きな特色は水路が屋敷地の内部を流れて利用されていることである。

（岐阜県飛騨市宮川町塩屋）宮川は岐阜県最北端に近い山間部に所在する戸数 10 戸の小さな集落である。集落は二つにわかれてそれぞれ谷川から水路をひき集落内水路として利用している。各家にはミズヤとよばれる槽があり、水路の水はミズヤに導かれて洗い物などに利用されている。またイケをもうけてそこに水をためる家もある。水道敷設以前はミズヤの水を飲料水に利用することもあった。

（滋賀県東近江市伊庭）

琵琶湖に近い大きな平野部集落で、伊庭川から引いた水路が集落のなかを走りカワと呼ばれている。ただ伊庭には自噴井戸をもつ家が多くその水もカワに流入している。洗い場はカワトと呼ばれ、自噴井戸をとまうものや、カワ側にイケスと呼ばれる魚を飼う施設を持つものが多い。かつて伊庭ではほとんどすべての家がタブネを所有し、農業や流通にタブネを利用することがおこった。タブネをカワに係留していたのも伊庭の集落内水路の大きな特色である。現在では約半分の水路がコンクリート化されているが、半分は旧来の景観を保っている。

（滋賀県彦根市本庄）

本庄は愛知川右岸に存在する平野部の集落で、その集落内水路の水源はすべて愛知川の伏流水に依存しているところに大きな特色がある。愛知川から水をひく底樋とそこから流れる水路はともにユと呼ばれ、ユごとに現在も組合が作られ水路などの管理を行っている。各家庭で利用される小さな水路はカワやツカイガワと呼ばれる。洗い場はミズヤと呼ばれ、自噴井戸がとこなうことが多い。小屋をとまなう大規模なミズヤもみられる。ミズヤのなかには水路の上に張り出した形態のものが多く景観上の大きな特色となっている。

(滋賀県東近江市紅葉尾)

紅葉尾は愛知川上流域の山間部に所在する集落である。この地域は奥永源寺と呼ばれ水田を持たない集落が多いが、紅葉尾にだけは多くの水田がある。愛知川の支流である神埼川に堰堤を築いて長い水路を引きそれを集落内水路として利用しているが、集落に引き込む前にはこの水路は農業用水路としても利用されているところが大きな特色である。水路はカワ、洗い場はカワトと呼ばれるが、現在ではカワからパイプで水をひき水槽にためて利用する形態が多い。また自噴井戸も見られる。イケをつくってカワの水を引き、魚などを飼う例もみられる。

(鳥取県西伯郡大山町羽田井)

鳥取県の大山北麓にある集落で、甲川から引いた水路を集落内水路として利用している。水路はツカイガワ・イデ・カワなどと呼ばれる。この集落で井戸を掘り始めたのは比較的新しく、それ以前は水路の水を飲料水としても利用していた。小屋形式になった洗い場はカワゴヤ、普通のもののはツカイバと呼ばれている。水路を屋敷地の中に取り込む例がいくつかみられる。また盆にはこの水路を通じて祖先が帰ってくるといわれており、8月13日の朝に花を水路にたててホトケサンを迎えたり、正月に水神さまをまつためツカイバに御幣を立てている家もあるなど、集落内水路と信仰の間に深いつながりがみられる。

(佐賀県神埼市)

筑後川下流域のクリーク地帯にあり、集落の内外にホリをめぐらした独自の景観である。ホリは現在でも残るが集落内水路としての利用はほとんどされなくなっている。洗い場はカワジと呼ばれ、ほとんどの家がもっていた。共同でひとつのカワジを使うこともあった。飲料水は井戸水をつかったが洗濯や食器の洗い物はカワジでおこなった。ホリの幅は広いがタブネを使うことはそれほどなかったようである。

③集落内水路の類型

集落内水路を定義することは困難であるが、ここでは一応集落のなかを通る水路であ

って、常に水が存在しているものに限定しておきたい。つまり集落内にある水路であっても雨のときだけに流れる雨水排水用のものや、田の水入れのときにだけ水が流れるものは集落内水路からは除外する。しかしながら集落内水路と農業用水路は判然とはわかれず、集落内水路として利用したのちその水が水田などで利用されるものが大半であり、先にみた紅葉尾のように農業用水路として利用されたのちに集落内でも利用される例すらみられる。このようなことから考えても集落内水路は水田稲作と深く関連した存在であることは間違いがない。また集落の周囲を水路やホリが囲むいわゆる環濠集落についてはこれまで中世などに防御のために作られたという説が強かったが、現実の機能としては排水や洗い物に利用されていることから環濠もまた集落内水路内水路のひとつの形として理解すべきであろう。

集落内水路は大きく流水型と溜水型に分類できる。ほとんどが前者であるが、溜水型は先にみた佐賀県神埼市などの低地で水の流れがほとんどない地域に見られる。伊庭は流水型であるが、かつて琵琶湖周辺には溜水型の水路をもつ集落が多くみられた。名称的には流水型がカワ系、溜水型がホリ系に対応するものが多い。数量的に多い流水型集落内水路を、用水源ごとにみると、大半が河川から水を引くものであるが、本庄のように河川の伏流水を利用するものもある。また塩屋のように谷川を利用するものでは、河川と水路ができないものもある。長崎県島原市船津のように湧水を利用するものもみられるが、ため池を用水源とするものは当然のことながらほとんどみられない。

また屋敷地や道路との関連で分類すると、道路の脇を側溝として流れるものが多いが、道路の中心を流れるものもみられ、また屋敷内に取り込まれて利用される形態も先にみた新発田市米倉のように存在する。

水路の水を利用するための施設は、もっとも簡単なものは水路に橋をかけたり、水路内に石を置いたりしたものであるが、いずれにせよ水面との距離を短くする必要があるためなんらかの造作が行われている。水を溜めるための装置をもうけそこに水路から水を引き込むものが多いが、その上に小屋をかけたり、母屋のなかにそのような装置を作る場合もある。また自噴井戸や井戸をその近くに設けることも多い。

溜水型の水路では、船つき場を設ける場合が多いが、そのようば場所では船におりるための階段付近が洗い場としてつかわれる。

④集落内水路の機能とその変化

集落内水路のかつての機能としては、生活面では飲料水・洗濯・汚物の洗濯・魚の飼育・

食器洗い・風呂水・防火用水・溶雪などがあった。また生業面では農具や労働着の泥おとし・野菜などの水やり・漁撈などがあった。さらに船を水路で利用することもあった。これらの機能を果たすためには、水質を保持する必要があり、集落内で水路利用についてルールが定められることが多かった。ことに利用した水の排水については厳しかった。オムツなどの汚物を洗う場所が集落下流側に特に定められていたところが多い。

滋賀県下の3集落(杠葉尾・本庄・伊庭)で集落内水路の機能の変化を調査したところ、現在では野菜の泥おとし・魚の飼育・防火用水・農具洗い・野菜の水やりなどに利用されるだけに変化している。人間の身体に直接接触する利用がへり、被服や道具を通じて間接的に接触するものに限定されて利用される傾向にある。変化にはいくつもの要因が考えられるが、ことに重要なのは水道の敷設である。また自動車の利用がふえ道路を拡張するために集落内水路を埋めたり、鉄網をかぶせたりする例も多い。

⑤集落内水路の文化資源化

近年、集落内水路を文化資源として再利用する動きが見られる。農業分野での地域用水、土木分野での環境用水などの概念はそれに深くかかわるものであり、ことに2006年に新潟県亀田郷において環境用水に水利権が認められたことは、今後大きな影響を与えると思われる。また文化財の概念としても文化的景観があらたに登場し、集落内水路もそのひとつとして注目されている。滋賀県高島市針江はその水路の景観が評価され2010年度に国の重要文化的景観に指定された。一農漁村であった針江はテレビ放送などを契機に多くの人を訪れる場所となった。また岐阜県郡上市八幡や長崎県島原市など集落内水路を整備しある種の観光資源とし利用しているところも見られる。滋賀県においては甲良町がせせらぎ遊園の町として町内の集落内水路の整備に取り組み、また長浜市(旧高月町)雨森でも水路の大規模な整備を行い全国的なモデルケースとなっている。

⑥今後の課題

集落内水路に対する関心はかなり広がっており、今後はその活用も進展することが期待される。しかしながらこれまでの整備においては景観面だけに着目するものが多く、集落内水路の機能自体の見直しには至っていない。本研究ではその伝統的な姿に着目したが、今後は調査事例数を増やすとともに、調査の深度を深めることによって集落内水路の伝統的機能とその変化を明らかにし、さらにはその成果を広く社会に発信することによって、集落内水路が従前からもっていた機

能の再評価につなげる必要がある。そのことによって水質や景観に対する社会的な認識を喚起することが可能となるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

- ① 市川秀之、「湖東地域における集落内水路の機能とその変化」、『人間文化』27号(滋賀県立大学人間文化学部)、査読なし、2010、pp2~pp15

〔学会発表〕(計1件)

- ①市川秀之、「滋賀県下における集落内水路の利用形態」(日本民俗学会第63回年回、2009年、国学院大学)

〔図書〕(計1件)

- ①水野章二編『琵琶湖と人の環境史』、岩田書院、2011、pp209~pp237

6. 研究組織

(1)研究代表者

市川 秀之 (ICHIKAWA HI DEYUKI)
滋賀県立大学 人間文化学部 教授
研究者番号：80433241

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし